

# ビデオを見て 保育を考える

守永 英子

私のクラスに、十五年も観察に通ったとおっしゃるF先生の、記録のビデオを見せていただく機会があった。十五年のうちの最後の三年間のもので、私にとっては、最後に担任したクラスの入園から卒業までのものである。保育中の忙しさの中では、見えなかつた子どもの細かい動きが、ビデオによつて、まざまざと見られたことは、感動的であつた。

三歳児クラスの入園して間もない時期のビデオでは、保育室の出入口近くに、数名の母親の姿が見える。母親から離れられない子どもや、離れてはいても泣いている子どもが、毎年、何人かはいるが、このように多いのは、私にとっても、初めての経験である。二十

名のクラスの半数ほどが、程度の差こそあれ、入れ代わり立ち代わり、そのような時期を過ごした。三歳児二十名に保育者一人では、手のかかる子どもが多い場合、手がまわりかねて、それが又、不安を呼び、相乗的に大変さを増すのかもしれない。数十年、子どもたちの写真を撮りにきて、子どもの姿を見続けてきた出入の写真やさんが、「今年は大変ですね」と同情してくれるほど、いかにも大変なクラスの雰囲気であった。

その中で、ビデオが捉えている入園後一週間目のM子の姿は、動きも少なく、堅い表情で、机に向かって、画用紙にクレヨンで何か描いている。M子が、入園式の日から、泣いて母親から全く離れられないので、母親も、保育室の入口近くのいすに腰かけ、M子の様子を、堅い表情で見ている。保育中は、漠然と感じられていた、母と子の、重苦しい、切ない“時”を、ビデオは、さまざまと見させてくれる。

私は、楽しそうでないM子のことが気にかかりながらも、園庭に行きたいというF夫の求めに応じて、庭に出たり、Y子にさし出された砂のごちそうを受けとったり、R子を手洗いにつれていったり、不安そうなN夫に声をかけたり、と次々に起ることへの対応に追われる。追われながら、一方では、M子が少しでも、楽しさを感じてくれる手だけはないかしら？ と、心のうちで探し求める。

M子は、クレヨンで何か描いた画用紙をまるめて筒にしたものを、母親の方に向け、のぞく。

筒にセロファンをはって、違う色に見えたなら、M子は喜ぶだろうか？

黄色いセロファンを、M子の筒にあてて、「ママ、何いろに見える？」と働きかけてみる。M子が興味をもった様子に、「はる？」と尋ねると、初めて提案を受け入れて、セロファンテープでセロファンをはるのを手伝う。M子が積極的にはる意志を見せたので、そのことが、M子の気持ちに反したことではなかつたと、ほつとする。セロファンをはつた筒で、M子がまわりを見まわすのを見て、首にかけられるように、リボンをつけてあげる。

その日の保育日誌をみると、「リボンで首にかけるようにしてあげると、喜んでもつて帰る。初めて、帰りは、泣かずに腰かけていた——不思議な変化」と記されている。

ビデオは、M子の反応を、もう少し詳細にみせててくれる。初めて、そのビデオをみたとき、私は、M子の、その小さな変化に深く感動した。リボンで首にさげるようにしてあげたとき、M子は、ビヨン、ビヨンと、とびはね、それを受けて、母親にも笑顔がみられた。M子は、自分から動き出し、机のまわりをまわる。その動きが早くなり、気持ちの弾みが感じられる。まわり方も大きくなり、M子の世界が広がってきたことを象徴するかのようであった。M子は更に、乳母車をみつけて、それを押してまわった。私の小さな心遣いを、M子は、しっかりと自分のエネルギーに変えていったようであった。心の変化を、子どもは、何とこまやかに、体で表現するものであろうか、と思う。ビデオは、保育の中

では見届けられない部分を見せてくれる。

五歳児の六月初めの、砂遊びからけんかが起ころる場面のビデオも、興味深いものであった。保育の中で、保育者が、喧嘩の訴えを受けるとき、けんかの起ころる一部始終を、見ていないことも多いと思うが、皆さんには、どのように対応していられるのであらうか。

そのとき、保育室にいた私は、砂場にいたS夫の「先生、先生」と泣き叫ぶ声に、急いで、砂場の様子を見にいく。S夫は、「水をかけられた」と訴えるが、まわりの子どもたちは皆、『自分は関係していない』と口々に言う。事情がつかめないままに、とにかく子どもたちの気持ちをしづめたいと思い、それぞれの子どもの言い分を聞くことにする。聞きながら、心のうちで対応を模索するが、私が方向をつかめないうちに、子どもたちの険悪な空気が自然に治まってきて、私が、何か役割をとる必要も、なくなってきたようを感じられる。私は、「そんなに、けんかしなくてもよかつたみたいね」と感想を言つただけで、子どもたちは、活動を開いていく。

ビデオをみると、私が呼ばれる前の、子どもたちの活動がわかる。それぞれの子どもが、イメージを出し合い、それを調整し、共有しながら、『橋作り』をしている過程で、イメージが衝突して、けんかになつたのである。

おもしろいことに、「水をかけた」と言われたM夫は、画面では、じょうろをもつて、S夫の後を通つたのであるが、初めてビデオを見たとき、私には、M夫がわざと水をかけ

たようには見えなかつた。ビデオを撮つてゐたF先生も、そう思わなかつたようである。

M夫は、おとなしい子どもであつたし、ざんぶりと水がかかつたわけでもなかつたので、誤つてかかつたと思えた。しかし、くり返しビデオを見ているうちに、その水のかけ方は、控え目であるが、意図的であつたことが見えてくる。M夫は、S夫と対立したT夫の仲良しである。おとなしいM夫の、T夫に味方したい気持ちの現れと理解できる。

ビデオですら、見極めにくい事實を、周囲の子どもたちが捉えるのは至難のことであろうし、それどころか、子どもたちは、自分の立場を守ろうとすることが先に立つて、私の理解を助けようとするゆとりはなかつた。

状況が捉えられないまま、はつきりした役割もとらず、何とも無策だつたと思う。ただ、救いは、事實を突きとめようと子どもを問いつめてうそをつかせるような状況を作らなかつたこと、子どもたちが反目し合つたままで終わらずに、活動が再開していくたこと、子どもから私への働きかけがふえて、けんかへの対応が、子どもとの距離を広げることなく、受け入れられたと感じられたこと、などである。

しかし、他に、対応の仕方がなかつたであろうか。他の人だったら、どのように対応するのだろうか。今なお、心に残る課題である。

(元・お茶の水女子大学附属幼稚園)